

8 権利としての社会福祉をめざして

まさもり
正森 克也 (社会福祉法人こぼと会理事長)



◆ 将来自分はなんのために働くのか? …………… ◆

もう四〇年も昔、私はどちらかというに進学校といわれる高校に入学しました。クラスメートはみんなお勉強ができる子たちです。私はあつという間に真ん中、そして気がつけば、「上を見ればキリがない、下を見たら後がない……」という状態になりました。

なにも考えずに目の前にある勉強をこなしてきた私でしたが、そのときはじめて、なんのために勉強する(学ぶ)のか? ということを考えるようになりました。クラスの友人に問うと、「よい大学に入り、よいところ(企業)に就職し、ある程度の高収入を得

る……」という答えが返ってきて、なんだかガツカリしたような気になりました。医者になると言っていた友人もいましたが、まあまあ「ちゃんぽらん」な男で、本当にこいつが医者になってよいのか? と、将来の患者のことを心配することも……(笑)。

それまで、「偉い(賢い)人」というのは、その知を使って、まわりの人に光を与えるような「発明」であったり「医療」であったりを生み出すものと信じていました。が、どうやら今の世の中、そういうものではないのだということが少しずつ見えてきた高校生でした。

さて、それならば、自分はどう生きるか? ということを考え、教育・医療・福祉といった分野で働くの

が気持ちよさそうだと考えるようになり、日本福祉大学で社会福祉の勉強をしよう、と、進路をそこに定めました。

◆ たくさん遊んで、たくさん学んだ学生時代 …… ◆

大学では、お世辞にもマジメとは言えない学生でしたが、そこで見聞きすることは、私にとってとても新鮮なものでした。授業やゼミ、サークルのイベントや学生自治会活動、原水禁世界大会に行ったことなど、目から鱗(うろこ)が落ちるような学びがあふれていました。

憲法を読んで、一つひとつの条文について、一言一句理解を深めることや、「人権」という、ともすれば抽象的な言葉を具体的な事例を通じて考えたり、話し合ったりしながら理解を深めていくことは、とても楽しいことでした。それらどれも、わかったつもりでも、自分の理解がまだまだ足りないと感じかされるのでした。そして、権利とは与えられるものではなく、幾多の犠牲のうえに勝ち取られて、そこにあるということも知りました。

◆ 「権利としての福祉」の立場にたった職場で働きたい …………… ◆

大学の後半は就職を考えることになりました。私は、高齢化が進むなかで、住民運動で特別養護老人ホームをつくる活動が全国的に盛んであった情勢の波に乗るように、高齢者福祉の分野に自分の進路を決めました。

大学卒業後は、兵庫県の特養「喜楽苑」に就職、その後、大阪総合福祉専門学校の夜間部の教員になりました。二〇〇〇年一月、吹田市の「誰もが入りたくなる特別養護老人ホームをつくる会」の運動が実現したことをきっかけに、二〇〇二年の春、「社会福祉法人こぼと会 特別養護老人ホームいのこの里」に就職し、今にいたります。

こぼと会の初代中略(なかじ)理事長、そして岩崎理事長が背中を押してくださったこともあり、社会福祉施設経営者同友会、21・老福連、そして、社会福祉経営全国会議など、全国的な社会福祉の運動に大きく関わらせていただくことができました。志を同じくする全国のみなさんとともに社会福祉の仕事ができるよるこびを感じつつ、これからも微力を尽くしていきたいと思えます。